

ご注文は死神ですか？（完結）

風墳K

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

木組みの家と石畳の街に戻って来た主人公、零雄（レオ）
これから彼のほのぼのとした日常が始まる。

…多分

注意

BLEACHのキャラは出てきません

戦闘は極めて少なめです

オリジナル斬魄刀が出てきます

虚は変態です

主人公は男の娘です

未完ですが、完結にさせてもらいます。理由は書いていたデータが使えなくなっただけのためです。

やる気になったら、続きもしくはリメイクを書きます。

それでは。

目次

第1羽	ひと目で異様な霊圧だと気付いたよ	1
第2羽	小麦を愛した少女と霊圧に愛された少年	10
第3話	自分の部屋で良く月○天衝の練習をしたよね	22
第4話	ラッキーアイテムはコーヒーと妹?	35
第5羽	レオと悪意無き敵意	44

第1羽 ひと目で異様な霊圧だと気付いたよ

「うわー、久しぶりだな、この街」

俺の名前はレオ。零のレに雄のオでレオだ。

こんな主人公的な話しているからして俺が主人公な訳で語り手である。見た目は紺色の綺麗な髪で前髪は耳に掛かる程度の長さで後ろ髪は首筋が少し見える程度に伸びている。瞳の色はなんと金色。ゴージャス感ある感じだが、あまり目立たない。そして身長はなんと157cm！スッゲー小さいのだ！これは家族が全員小さいからしかだかない！そして、顔。イケメンというよりも女の子ぽい…てか女の子って言われる。俺的には中性的な顔立ちと思っっているよ。今の服装はオレンジ色の長袖パーカーに髪の色よりも濃い紺のジーパン、そして真っ白な髪止め（何も飾りが着いていない）を前髪の左側に着けている。まあ、前髪が邪魔になるから髪止めは着けるだけなんだけどね。切るのももう少し後にしたいし…（予算的に）

そんな俺は今年からこの実家のある街にある高校に入学する事が決まり更には父親との関係で母親と妹のいるこの街へと戻って来たのだ。

そう、ここ。木組みの家と石畳の街に…

改めて紹介しよう。俺の名前はレオ。漢字はさつき言った通りだ。この街に戻って来たのもさつき言ったな。

さてさて、こんな事を言う辺り俺は痛い奴だと思われているだろう。いや、痛い奴であるのは仕方がないと思っっている。

何故なら俺はこの世界の前の世界の記憶を持っているからだ、所謂転生者という奴である。前の記憶があるんだ。精神的にはそこら辺の同級生とは精神年齢が違うため見える世界が違ってしまふのだ。だから、こんな風に話してしまっている。

さて、話を戻そう。

俺は晴れて、生まれ…二度目の誕生をし、小学校入学前まで育ったこの街に戻って来れたのだ。

父親の転勤と一緒に付いて行って早9年。やつとこの街へと帰ってきたのだ。

…
とは言ってもお盆休みや正月休みなんかは此方に戻ってはいたが

…
また話がズレてしまった。

今俺はこの街をスーツケースを引きずりながら地図で自分の位置を確認しながらこの石畳の道を進んでいる。

まずは、俺が独り暮らしするマンションに向かわなくてはいけない。(荷物的に)

さて、皆ツツコミを入れたいのはわかっている。そう、折角家族がいる街に戻って来たのに何故独り暮らしなのか…ということだろう。

まあ、それは私的事情だ。察してくれ。

そんなこんなで俺は歩いている訳なのだが、その目の前に見たことのある物体が二体程俺の行く手を塞ぐように並んでいた。

その物体の見た目は白い大きな仮面のようなモノを着けて一体は人間のような体だが、見た目が青色であり、胸には大きな穴が空いている。もう一体は犬のような骨格をしているが此方も白い仮面のようなモノを着けていて、体の色は黄緑である。やはり、胸に穴が空いている。その二つの物体は此方にまだ気が付いていない。

わかる人にはわかるだろう。コイツらはあの有名な週刊誌に連載されている漫画の敵キャラ、人の魂魄を喰らう悪霊…そう、BLEACHに登場する虚だ。

それが街中の昼間、しかも人通りの多い道にいるのだ。

勿論周りの人には虚は見えない。当たり前だけどね。

え？なんで俺が見えるかって？

俺はポケットからあるものを取り出す。

五角形の木の板の用な物を持った瞬間に俺の体は肉体と魂魄に別れる。

肉体の体はまるで力なく地に倒れるのかと思うと近くのベンチに眠るように横たわった。

そして、魂魄の姿…黒い着物…所謂死覇装というやつになり、腰に

は刀：斬魄刀がある。

もう一度自己紹介しよう。

俺はレオ。髪は長めで紺色、瞳の色は金、男、身長は少し低めの157cm、癖は時より犬歯が出てしまうこと。

そして、転生者であり：

死神だ。

OP

*

じゃないよ

多分、ほのぼの系アニメOP辺りだと思うよ♪

(作者の願望)

よし、かつこよく決まった。多分今頃オープニングが始まって俺のカッコいい姿が頭の中に映し出されているはず…

曲は勿論BLEACHのOP辺りで。

そんな事を思いつつ俺は虚の目の前に立つ。

『お、これは、クイーン!!こんな所で会うなんて…なんと運命的なのだろうか!!』

人形の虚が俺の事をクイーンと言った。そう、虚達は俺の事をクイーンと呼ぶ事になっているらしい。

理由?この前聞いたら『貴女は美しいのだ!その美しさは我等虚には無い。だからこそその美しさのあるあなた様が虚の女王となって我等虚達を束ねて欲しい!!いや、もう踏んでください!!』って言うた。

確かに俺は中性的な顔立ちだと思っているよ。良く女の子に間違われるからナンパもされるし…

虚達も俺が男だと知っているはずなんだ…だって毎回「俺は男だか

ら！」って言ってるもん。

「あのさ、俺男だから。女王っていうより性別違うから…」

『いいのだ！男の娘である貴女はクイーンなのだ！』

そう、俺は男は男でも虚達から見たら男の娘なのだ。中性的な顔立ちが牙を向いた瞬間である。言っておくぞ、中性的な顔立ちだから女の子にモテると思うな！男は男らしくてモテた方がいい！

男にモテてもなんもなんねえから！てか、こんな虚（下手物）にモテるなんて嫌だから！

「取り合えずなんでお前らこんな所にいるんだよ…」

『おっと、我等の目的をすっかり忘れていた！我等は幼女を見に来たのだった！』

「また変態かよ！」

何故かこの世界の虚は変態が多い。理由は知らないけど。

ロリコン然り、男の娘然り…

あーなんでこの世界に滅却師がいないんだよ…こんな変態ども一掃した方がいいのに…。でも、この現世を安定させるには虚の存在も必要みたいだし…

『まあ、目的はどうでもいいな。クイーンがそこにいるのだ。是非とも我等とお茶をして欲しいものだ。虚憧れの星…クイーンとのお茶…何とも贅沢な日々…』

『ガウガウ!!』

やつと犬形の虚が口を開いたな…まあ、予想通りに何も言葉を話せなかつたみたいだけれど…

それと、このままだと俺の貞操が危険なので一応反撃はしておく。いや、もう退治しよう。社会的にコイツらは害がある。

あ、後前の説明で虚が魂魄を喰うって言ったけど、実際今はあまりそういった事をする虚は少なくなつたそうだ。その変わりにこんな変態が増えたと…

俺は腰から刀を取り出す。

鞘から灰色と黒の金属光沢をしている刃を抜く。

『おお！男の娘から棒が抜けている！』

何興奮してんだ、この変態（虚）は…

「お前ら斬つても大丈夫だよな…」

『はっはっは！我等、クイーンに斬られるのならば本能ですぞ！』

『ガウガウ♪』

なんでコイツらこんなに死にたがりなの？

まあいいや。取り合えず斬ろう。

人形の虚は体を大の字になる。

俺は何も言わずに大きくジャンプして、人形の虚を仮面を真つ二つになるように刀を下ろす。そして地面に着地と同時に人形虚が左右に分裂する。勿論絶命寸前である。

『ありがとうございまーす!!』

そう言つて消えていく人形虚。なんで感謝の言葉をいうんだ？お前殺られたんだぞ？

そう思いながらも俺は刀を犬形虚に向けて振るう。犬形虚は微動だにもせずその刃を我が身で受け止める。

横に振るつた刃が犬形虚の首を撥ね飛ばす。

『ガウガウガウ♪』

絶命するにも関わらず嬉しそうに消えていく犬形虚。

あ…これは考えちゃいけない奴等だったのかもな…

そんなこんなで行く手を塞いでいた（本当はたまたまそこにいた）虚を心身ともに昇天させた後、自分の肉体に戻り、ベンチから起き上がった、また独り暮らしをするマンションに向かう。周りから少し変な目で見られてはいるが、大丈夫、何時ものことだ。

（周りからは、いきなり寝込んだ女の子が今度はいきなり立ち上がったように見えた。完全におかしな人に見られている）

わかった人もいるだろうが、俺が独り暮らしをする理由、それは、家族を虚絡みの事件に巻き込みたくないからである。俺が死神なのを知っているのは父親だけであり、母親や妹には教えていない。

二度目の人生、俺を生んでくれた母親、そして、俺を兄にしてくれた妹にはどうか、虚と関わって欲しくない。死神である俺は虚に襲われる確率が高い。身体的にも性的意味でも。だから、家族の身を思っ

て俺は独り暮らしをする事にしたのだ。

まあ、俺のマンション代や生活費の殆ど尸魂界から支払われるからいいけど…

そんなこんなで今日から3年間暮らすマンションに着いた。(地図を見ながらだけど)

見た目は三階建てのレンガの建物。ベランダには鉢植えがある場所もある。日通りは…今午後で日影になっているあたりあまり良くは無いのだろう。それでもこの外装はお洒落で女性に人気がありそうだ。

俺はマンションの管理者さんに挨拶等をして部屋に案内され、鍵を渡される(勿論女の子と間違われたよ)。

部屋は、外装のレンガとは違い明るい木材製を使ったフロアリングがリビング、寝室と続いていて、玄関の脇に小さいながらも確りとしたキッチン、その少し先にお風呂と洗面所がある。

リビングのフローリングの床の上にダンボールが幾つかあることからして、既に荷物は届いていたようだ。(ここでダンボールが既に部屋に置いてある事にあまり疑問を持たない俺…)

俺はスーツケースを部屋に置いた後、財布と携帯、代行証をそれぞれポケットに入れて小さい鞆をスーツケースから出して携帯の充電器を入れる。

さて、実家に帰りますか。

そう思いマンションから出て、玄関に鍵をする。

そして、実家に帰るために石畳の道を歩く。

数分後

「ここは…何処だ?」

俺は一人で川沿いの道を歩いていた。

いや、別に方向音痴じゃねーし、久しぶりだから道に迷っただけだよ!多分…

おい!誰だ!今萌え要素増えたと思った奴!

俺は男だ!

そんな事を心の中でツツコンだ後、俺はある喫茶店に目が行く。
(いつの間にか川沿いから離れていたようだ)

「ラビットハウス…?」

何故か俺はその喫茶店が気になったのだ。

(CM的何か)

BLEACHを知っている人にとってどの話しが記憶に残っているかな?

個人的にはルキア奪還編が印象に残っている転生者の俺、レオ。
(一護の卍解に感動したわ)まあ、アニメオリジナルも含めて面白い話が多いのがBLEACHの魅力だと思ってるよ。

その中でも破面編。これは本当に凄かった…

なんでこんな話題を出したのかというと、目の前で喫茶店を覗いている輩が関係しているのだ。

白昼堂々と覗きをしている輩。

その中でも印象強いのは白い死覇装を着ていて腰に刀をぶら下げている所だろうか…

身長的には180はあり、髪の色はオレンジで短髪、体型は細みである。

身長や短髪から推測するのは、コイツが男ということ。そして、俺の記憶にはその特徴が当てはまる人物が一人いる。

…いや、変態の親玉と言った方がいいのか?

「グフフフフ…美少女が三人…」

窓からラビットハウスの中を覗く白い死覇装を着てヨダレを滴している男。

喫茶店の前は人が結構歩いているのに白昼堂々と覗きをしているこの男に誰も注意しない。というよりも誰も彼がやっている事に気が付いていないようだ。

それもそのはず。

奴は人間じゃない。

察しのいい人は直ぐにわかったかもしれないが、彼は破面だ。
そして、何より俺の苦手な奴だ。

「ん…後ろから視線を感じるぞ…」
独り言が大袈裟な破面は此方に振り替える。

何時かはまた会おうとわかっていたので覚悟はしていたが、まさかこんなタイミングでまた会うなんて思いもしなかった…

「おおおおお!!く、クイーン…いや、我が嫁!!」

「…現世でも尸魂界でも、虚圏でも同姓同士の結婚は認められてねーから。それに、俺はお前のこと嫌いだし」

「何を言うか!クイーン!確かにこの日本では無理だ。だが、現世での外国…つまり、別の国に行けば婚姻は出来る!更にクイーンはツンデレだという情報が…」

正直に言うとなんか俺はこの破面こと、ジーナス・オランチャイヤの事が嫌い…というより苦手である。理由は俺がいくら拒絶しても、それをポチティブ的に捉えてしまい、余計にまとわりついて来るからだ。

「なんでツンデレなんだよ…男でツンデレとか需要ねーよ」

「クイーンは男の娘であるから、需要があるのだ!」

理屈がわからない…。どうしてそこまで俺を男の娘に仕立てあげたいのだろうか…

取り合えず…この変態を尸魂界に送るか…。

そんで扉の中にでも入れておいた方が世の中のためになるだろう。

…あれ?そういうや、この前コイツを尸魂界の牢屋にぶちこんだはず

…

「なんでお前こんな所にいんの?尸魂界の牢屋に入ってたはずじゃ…」

「あ…あの牢屋か…あの牢屋なら抜けて来たが?それがどうかしたのか?」

「まさかの脱獄!?!」

「この世の美少女を目に焼き付け、クイーンと婚姻し、子孫を残すまで私は死なぬし、捕まらぬ!!」

「全部の条件達成不可能だから!」

「いいや…気持ちの問題だ！」

「気持ちでどうにか出来ることじゃねーよ！」

こんな会話をしている破面がまさか虚圏で一番強い破面…十刃の一人、しかもN.O. 0だなんて誰が思うか。

「大丈夫。時間がたてばそういう問題は解決される」

「いやいや、解決とかじゃなくて、俺がお前を拒否ってんだよ！それに、変態は時間がたっても変態だから！捕まる運命には逃げられねーから！」

「私は変態ではない！美少女好きで覗くのが趣味なだけで、心はクイーン！貴方と共にある！」

「お前の心なんていらねーよ。定価3円の価値もねーもんよこすな！」

「わ、我が愛の心は定価3円以下…だと…」

「そこで落ち込むのかよ!？」

とまあ、こんな感じに話している。そんな中、俺は右手をパーカーの右ポケットに突っ込み中に入っている携帯を操作する。連絡先は勿論尸魂界。この変態破面がここにいることを伝えなくてはいけない。それに、俺は今肉体がある状態でコイツと話している。そう、斬魄刀を出す事が出来ないからコイツと戦えない（相手には戦意は無いけど）から、強制的に連行出来ないし、霊感が無い人にとって一人でブツブツと話している痛い人と見られるに違いがないから、ここは、尸魂界の連中にコイツを託して俺はトンズラかくしかない。それに、俺は今、死神としての活動を休業してるし…

そんなこんなで数分後、ジーナスが俺を口説こうと頑張ってはいたが、男に口説かれる程俺は男を辞めてはいないので全く効果無く、此方に急遽来た死神達によってジーナスは尸魂界に連れていかれた。（その際に総隊長自ら来たのは以外だったが…）

それを見送った後に俺はいざ実家を目指して歩き出した。

数十分後、俺はまた迷子になった後、俺の事を心配で探しに来た妹と合流して実家に無事帰る事が出来たのだった。

第2羽 小麦を愛した少女と霊圧に愛された少年

◇ 前回までのあらすじ

レオ君、死神で、虚を倒して、実家に帰ろうとしたら迷子になったよ

そしたら、破面（変態）に会ったよ。

◇ 一方で、なんとか実家に帰ったんだよ。

◇ 数日後

この街に来てから迷子になること数回。なんとか実家とマンションとの行き来が普通に出来るようになってきた。

別に方向音痴って訳じゃない。だって、他の町とかに父親の転勤により引っ越しが多かったけど、道に迷うなんて、七回に五回ぐらいしかなかったらかね。

尸魂界でも、迷子になるなんて三回に一回程度だ。うん、方向音痴ではない。

そんな訳で始業式が明日に控えた今日、俺は一人街の探索を行っていた。理由なんて無い。暇潰しみたいなものだしな。それといつもなら道案内的役割である妹と一緒に出掛けるのだが、生憎妹は今日から学校。確か…中二だっけ。早いな…あのチビな妹がもう中学二年生っていうのが…まあ、今でもチビだけだな。（自分もチビだけ）それとあの中学二年生になるとかかってしまう病気にはかからないで欲しいものだ。…いや、俺の妹の時点でそれは無理か。

まあ、道案内なんていなくても、もう迷わないけどな。

数分後

「…迷った…」

案の定フラグを回収した俺。

場所は少し広い公園。何故か同じ風景を見ている錯覚に陥っていた。右側に同じ噴水がずっと見える。左側の景色は変わるのだが、少し歩くと何故かまた同じ風景に戻ってしまう。どうやら本格的に

迷ってしまったようだ。

(本当は噴水の周りをグルグル回っているだけなのだが、それに気付かない)

迷子になった時こそ冷静に判断しなくてはならないということは今までの修羅場で経験してきた。

そう、こういう事態には何度も陥っているのだ。そういう事の対処は冷静に考えることと決まっている。

俺は近くのベンチに座って考える。

さて…このミステリーを解決しなくては…

少年考え中…

…そうか！噴水を中心に歩くのが間違っていたのか！

そう気づいた俺は周りを見渡して驚く。

沢山のうさぎが俺を囲うようにいるのだ。

属に言う野良うさぎというもののなのだろう。俺の足元に来て鼻をヒクヒクとかせている事からして餌付けでもされていたのだろう。

俺は動物が苦手というわけではない。いや、ぶっちゃけ好きだよ。

(虚？あんな変態を動物と例えちゃ駄目だよ)

だからといって野良うさぎを平気で触る勇気は俺にはない。だって、いきなり噛まれたら痛いだろう？特にうさぎは。

てか、なんか持っていないの？って瞳で俺を見ないでくれ…、あ、生憎何も持ってきて無いんだよ…。手元にあると言えば…携帯、財布、代行証、念のためのソウルキャンディ、後は…キーホルダーにした斬魄刀(尸魂界の科学チームが肉体がある状態でも斬魄刀を使えるように、更に現世での銃刀法違反にならないようにするために開発した装置により斬魄刀をキーホルダー化出来るようになった)しか持っていない。

ソウルキャンディ食べるかな？

…いや、止めておこう。ソウルキャンディはある意味危ない。うさぎにとつて…

そんな事を考えている時に俺は同じ公園にもう二人の人影がある

ことに気が付く。一人は緑を貴重とした和服（着物）の女の子、もう一人は俺が通う予定の高校のピンクブレザーの女性制服を着た女の子だ。

制服の女の子は何か食べているように見えた。黒く四角い棒状の物からして、羊羹かな？

そうだ！俺の行く学校と同じ制服を今着ているということは、きっと先輩のはず！

だって、新入生が前日に制服で出歩くなんて聞いたこと無いもん。ということは、きつと先輩のはず…

先輩ということは、こここの地理がある程度わかる…はずだ。だって最低でも一年はこの街で暮らしているんだから…

という訳で俺は女の子に話しかけることにした。

女の子二人に歩みよりベンチの近くまで行った後に…

「おはようございます」

と元気よく挨拶を行う。いや、挨拶って大事だよ。だって挨拶する度に友達増えるんだもん。

「おはよう」

「おはようー」

緑の着物の女の子はおしとやかに、制服の女の子は元気よく挨拶を返してくれた。

挨拶を交わしたので、早速本題に入ろう。

「実は俺道に迷ってしまって…多分同じ学校の制服を着ているせ…」

「あー！そうだ！学校！早くしないと入学式遅刻しちゃう！貴女も同じ学校なんだよね？」

「制服からして同じだと…」

「なら、一緒に行こう!!」

「あれ？でも、今日は…」

そう言われて俺と着物を着ている女の子俺が通う予定の学校の制服を着た女の子に手を引っ張られ、噴水の周りを一周する。

「あれれ？戻って来ちゃった？」

「ちよ、ちよつと待って…はあはあ…あのねうちの学校、入学式は明日

なの…」

着物の女の子は息を切らして本当の事を話す。どうやら、この制服の女の子は今日から入学式だと勘違いしていたようだ。

「え？」

「だから、入学式は明日よ」

…うわく恥ずかしいわ…

制服の女の子は真っ赤になるった顔を手で隠して座り込んでしまった。

「うわー恥ずかしい!!」

「面白い子…」

この一連の流れを一緒に行動した俺はどんな心境でいればいいんだよ…てか、この制服の女の子…いや、この二人、どこかで見たような…

「ココアちゃんが迷わないように一緒に学校に下見に行きましょう」

「め、女神様!!」

どうやら、学校に下見に行くようだ。丁度いい。事前に家から学校までの道のりは何度も往復して覚えたから、学校まで行ければなんとか家に戻れるぞ。

「俺も一緒に行つていいか？」

「えーと…」

「俺の名前は、レオ。君たちと同じ学校の一年生だよ」

「私、ココア」

「私は千夜よ」

勘違いをしていた女の子がココアで、着物の女の子が千夜か…

あれ?もしかして、この世界って…ごちうさの世界?

いやいや、確かに転生前に見たことはあるけど…

てか、この世界、てつきりBLEACHのIFの世界かと思つたよ…まさか、あの難民続出のアニメ、ご注文はうさぎですか?の世界だったとは…

その後、俺とココアは千夜の案内で学校まで行つたのだが…

「ここが、明日から通う高校よ」

と千夜が校門を目の前にして言った。だが、俺は校門に中学校と確り刻まれているのに気が付いていた。

「私の新しい学舎かく見てるだけでワクワクするよ〜」

なんてココアが色々想像しているがどうやら、千夜もここが中学校だということに気が付いたらしく（多分間違えた）何も言わなかった…。

その後は千夜がちゃんと通う予定の高校に案内してくれた。

そこから、俺と千夜、ココアは解散して、各自家に帰ったのだった。

次の日 時間の都合上放課後

俺とココア、千夜はなんと同じクラスになり、ココアと千夜は話が合うため直ぐに友達になり、俺は見た目的に女の子と間違われ（服装的に明るい水色の制服と薄い肌色の長ズボン、勿論男性用である）挙げ句の果てには男装女子に間違われてしまい、なかなかクラスに馴染めず、前日にココア達と仲良くなったため、こうして一緒に下校しているのだ。

それに、この世界がもしアニメ、ご注文はうさぎですか？の世界だったならばココア達と一緒にいた方が面白い事がいっぱい起きるはずである。

「千夜ちゃん、レオちゃんと同じクラスになるなんて」

「ココアちゃんとレオちゃん、学校でも迷子になっててびっくりしちゃった」

「ははは…」

嘲笑うしかない…

そう、俺とココアは学校で迷子になっていた所を千夜に助けられてらったのだ。

それと、この二人、どうやら俺の性別を間違えているようだ。良く見ろ：俺はスカートを履いていない。

「あ、いい匂い…」

「パン屋さんよ」

あれ？この流れは、確かパンを作る話しだよな…

ココアと千夜はパン屋の目の前に行ってしまったので俺も付いていく事にした。

パン屋の目の前でパンを見る女の子二人と男一人（誰か女の子三人って思っただろ！）

「可愛い」

「パンが？」

「実家がパン屋さんでよく作ってたんだ。また作りたいな」

「お手製なの？すごい！」

確かに、ココアの実家ってパン屋さんだったよな。

「パンを見てると、私の中のパン魂が高ぶってくるんだよ！」

「わかるわ。私も和菓子を見てるとアイデアが溢れてくるの」

「うんうん！」

「でもでも、何より好きなのはできた和菓子に名前を付けること！」

「格好いい!!」

「格好いいのか!?それ！」

あまりにもボケが多いので最後ツツコミを入れてしまった…

待てよ…この二人と同じ学校、同じクラス…そしてボケ二人…。俺がツツコミ担当か!!

そして話しの流れ的に今度の休日、ラビットハウスにてパン作りをすることになった。

（そーいや、ラビットハウスって聞いたことあるな〜って思ってたけど、ごちうさの世界だったのなら、納得行くわ〜）

そして、その休日。

俺はラビットハウスに来ていた。

「同じクラスの千夜ちゃんとレオちゃんだよ」

「今日はよろしくね」

「よろしくな」

「チノちゃんトリゼちゃん」

「よろしくです」

「よろしく」

「あら？そちらのワンちゃん…」

「ワンちゃんじゃないです」

「この子はただの毛玉じゃないよ！」

「毛玉ちゃん？」

「モフモフ具合が格別なの！」

「癒しのアイドルモフモフちゃんね！」

「ティピーです…」

まさか、ティピーの中身がいい歳したおじさんだとはチノ以外思わないだろう。

その間撫で回されるティピー。普通の男ならそこ代われと思うんだらうな

「ココアがパン作れるって以外だったな」

「えへへ」

「誉められてないと思います」

「さあ！やるよく。皆、パン作りを舐めちゃいけないよ！少しのミスが完成度を左右する戦いなんだからね！」

「ココアが珍しく燃えている!?このオーラ、まるで歴戦の戦士のようにだ…。今日はお前に教官を任せました！よろしく頼むぞ」

「サア！イエツサ!!」

「私も仲間にく」

「暑苦しいです」

「右に同じく」

因みに、テーブルを中心にココアとリゼが向かい合っていて、俺の右隣にチノ、そしてチノの右に千夜がいる。テーブルの上にはパン作りに使う材料と道具が置いてある。

「各自、パンに入りたい材料を提出！」

「イエツサ!!」

「サー」

「暑苦しい…です…」

あえてもうツツコミを入れない俺。だって、ツツコミが俺以外にも

チノやりゼがやってくれると思うし…

「私は新規開拓に焼きそばパンならぬ焼きうどんパンを作るよ!!」

「焼きうどんパンってなんだよ!確かに焼きうどんってあるけどさ!!」

「私は自家製の小豆と梅と海苔を持ってきたわ」

「梅と海苔って合うのか!?!」

「冷蔵庫にイクラと鮭と納豆とゴマ昆布がありました」

「一体何を目指してるの!?!」

「これってパン作りだよな…」

それぞれ材料を出すさまともなのが殆ど出てこない。唯一まともと思うのはリゼの持ってきたイチゴジャムとママレードジャム、そして俺が持ってきたブルーベリージャムとチョコレート、ウインナーだろうか…

それにしても…まさかチノまでボケに回るとは…油断も隙もねえ…これがごちうさメインキャラか!!早く俺以外のツツコミキャラ来い!!

このあと、ココアを筆頭にパン作りを始めていく。

そして着々とパン作りは進み、パン生地を捏ねる座業へと移る。

「パンを捏ねるのって凄く体力がいるんですね」

「腕が…もう動かない…」

「リゼさんは平気ですよ。それに以外にレオさんも…」

「何故決めつけた?」

「まあ…一応鍛えてたし…」

「へえ…お前も色々と訓練していたのか?」

「いや…自主的に…色々ね…」

そんな会話をしていると千夜の顔色に疲労が見え始める。

「千夜ちゃん大丈夫?」

「俺が変わろうか?」

「うんうん。大丈夫よ」

「頑張るな」

「ここでおれたら武士の恥じぜよ!生きている訳にはいかんき!!」

「いきなりどうした!？」

そして、生地が完成し…

「そろそろいいかな？」

「ココアが生地を触って確かめる。あ、俺もパン作り始めてだからこういうのは経験者に託すしかない。」

「もちもちしてて凄く可愛い!」

「生地が?」

「凄い愛だ…」

まあ、タイトル通りつて所だよな…

「一時間程寝かせまーす」

生地をボウルに入れてラップで蓋をした後タイマーを一時間後にセットする。

一時間後

一時間という名の仮眠を取る少女達。その間俺も少し寝ていた。タイマーの音で目を覚まし、生地を見る。

先程よりも大きく膨らんだ生地をパンの形にしていく。

その際にそれぞれ持ってきた材料を使って各々のパンを作っている。

「チノちゃんはどんな形にしたの?」

「おじいちゃんです。小さい頃から遊んでもらってたので」

「おじいちゃん子だったのね」

「コーヒーを煎れる姿はとても尊敬していました」

おじいちゃんお前の上にいるから。頭の上にいるアンゴラうさぎ、おじいちゃんだから!!

チノはそのおじいちゃんの形をしたパン生地をオーブンの中に入れる。

「では、これからおじいちゃんを焼きます」

チノの上のアンゴラうさぎに見せるようにオーブンの戸を閉めるチノ。以外に鬼畜である。そして、その言葉はある意味危険だぞ。

「千夜ちゃん、レオちゃん、ちよつといい?」

「何?」

「じゃじゃーん!千夜ちゃんとレオちゃんにおもてなしのラテアート
!」

そう言つてココアは俺と千夜にうさぎの絵が書かれたラテアートを
見せる。(勿論二つだよ)

「うわ〜可愛い!」

確かに、可愛い。てか、普通に上手い。

「今日は会心のできなんだ!」

「味わっていたかくわね」

「ありがとう。俺も味わっていたかくよ」

カップに口を付けて…

「ああ…」

少し躊躇いカップから口を放す

もう一度飲もうとすると…

「あ…」

一度ココアの顔を見る。普通に笑顔。

そして、今度は少し飲むと…

「あ…傑作が…」

コップから口を放すと笑顔に戻るココア。

の、飲みにくい…

そしてココアは飲みにくい中コーヒーを飲む俺と千夜を他所に視
線をオープンにへばり付くようにパンを見ているチノへと移す。

「チノちゃんさつきからオープンに張り付きっぱなしだね」

リゼがチノの元に行つて話しかけている。

どうやらパンが大きくなっていくのが面白いようだ。

そして、とうとうパンが完成してそれぞれが作ったパンの試食会が
始まった。

因みにこの試食会でラビットハウスの看板メニューが決定する…
らしい。

「いただきますー!」

各自、自分の作ったパンを口に入れる。

「美味しい！」

「ふかふかです」

「さすが、焼きたてだな」

「これなら看板メニユーにできるね」

「この梅干しパン」

「この焼きうどんパン」

「この焦げたおじいちゃん」

「正直言うけどどれも食欲わかないよ…」

その後、ココアが別のパンを取り出す。

あ、俺は普通にブルーベリージャムが入ったパンを作ったよ。少し酸っぱさがあったていい感じだ。

「じゃーん！ティピーパンを作ってみたんだ！」

「わあ、可愛い！」

「…」

確かに可愛い。だが、その一つに何故虚の仮面の形をしたパンがあるんだ!?

「看板メニユーはこれで行けそうだな」

「いやいや！一つ変なの入ってるから！」

「あく、それね。なんか焼いてる時に形が変わっちゃったみたいなんだけ。でも、味ともちもちさは保証するよ！」

たまたまなのか!? たまたまティピーの形が虚の仮面みたくなっちゃったのか!?

何か変な力でも働いたか!?

え!? もしかして俺の霊圧とかが関係してたり!?

…それは無いか。

「食べてみましょう」

そう言っって一人ずつティピーパンを手に取る。でも、俺が取るのは…ティピーならぬ虚パンな訳で…

「もちもちしてる…」

確かにもちもちしてる。なんか不思議だ…いつも堅い虚の仮面が

柔らかいのは…

「えへへ…美味しくできてるといいんだけど…」

それぞれ口に入れる。

中にはギツシリとイチゴジャムが入っていて美味しい。

美味しいけど…

「リゼちゃんが買ってきたイチゴジャムだよ。美味しいね！」

「ああ…でも…」

俺とリゼはティーパーン（俺のは虚パン）を改めて見る。

うん…丁度食べられた後が真っ赤であって…なんか…ティーパーンを丸かじり（俺は虚を丸かじり）してるみたいで…

「なんか…エグいな…」

俺とリゼは声を合わせて一言感想を述べたのだった。

第3話 自分の部屋で良く月○天衝の練習をしたよね

前回までのあらすじ

レオくん、ごちうさメインキャラと仲良くなつて、パン作りしたよ。

◇
パン作りをした後日、千夜に甘兔庵に招かれたのだが、生憎断った。理由としては、バイトをしたいがため色々なお店を回るためである。

正直に言うとなんか俺は金銭面でそこまで裕福とは言えない。確かに尸魂界からの援助は出てる。でもその殆どはガス代、電気代、水道代、食費により無くなってしまふ。だからと言っていい年した少年が親に小遣いを貰うなんてカツコ悪くて出来ない。

そうになると、自由に使えるお金がほとんど無い訳である。

その結論としてバイトをしよう！ということになったのだ。

そう考えて俺はチノとりゼが甘兔庵のお品書きに戸惑っているのを予想しながら各お店を回って行くのであった…

数時間後

アルバイトを募集している色々なお店を回ってはみたのだが、どこも男子の雇用をしておらず、結局の所、無駄足だった。

なんでどこも男子の雇用がねーんだよ!!

「接客業なので男性の方はあまり雇用しておりませんので…」

と言われまくったよ!

最初は俺を見て大抵の店長が期待した目で見つめているのに俺が男だと話すと手のひらを裏返しにして前のセリフを言うんだぜ。

全く、これだから、中性的な見た目は嫌なんだよ…

あーあ…これならココア達と一緒に甘兔庵に行けば良かったな…

と、考えるが後の祭である。

その数日後

厚い雲が空を覆ったその日の午後、バイト探しをしている最中、俺はあるお店の前に来ていた。

「…ラビットハウスか…」

そう、あのラビットハウスである。

別にここのバイトの求人が出てた訳ではない。何となくここに来てみただけなのだ。

コーヒー一杯程度なら飲める予算の余裕があるので休憩がてら入ることにしたのだ。

それに雲行きが怪しくいっていつ雨が降るかわからないからな。

ラビットハウスの扉を開けると…

そこには、仕事用の制服姿のココアとりゼ、チノの姿と、千夜、更には後のツツコミ役となる（既になっている）シャロの姿があった。

「いらっしやいませ…ってレオちゃん!？」

「少し遊びに来たよ〜」

そう言って一回りお店の中を見回す。

やはり、シャロと千夜がお客としてテーブルについていた。

「よ！千夜！それに久しぶり！シャロ！」

そう俺は言って千夜とシャロの近くの席に座る。

「え!?!レオ!?!レオなの!?!」

「なんだ？シャロ、知り合いだったのか？」

「えーと…知り合いというより、腐れ縁と言ったほうが…」

「俺の扱い酷いな…約6年ぶりだっというのにさ」

実はだな、俺とシャロは面識がある。あれは、小学校1年の7月頃、俺は入学した学校から転校してシャロの通っている学校へ移ったんだ。その時は、ごちうさのキャラだとはわからずにスルーしてたんだよな。

転校する小学3年の6月中旬までクラスメイトだったんだよ。

「だって…あんたと関わるとろくなこと起きないのよ!」

「え〜?そう?」

「そうよ！無駄に頭はいいし、運動神経いいし…方向音痴でよく迷ってるし…」

皆の視線が俺に集まる。止めろ…俺は方向音痴ではない…。

「そういえば、シャロちゃん、小学生の時に自分より頭のいい人がいるって言ってたわね？それって、レオちゃんのこと？」

「そうよ」

「へー、レオは小さい時から運動神経よかったのか」

「これは、リゼちゃんのためはれるかもしれないね！」

「何故私とためをはらなきやあけないんだ？」

「…レオさんとリゼさんがタッグを組んだら怖いものなし…かもしれない
ませんね」

「おいおいおい！ボケまくるのを止めよう。俺のツツコミが間に合わない！」

「ボケてるつもりはないのだけど…あ、先輩、注文いいですか？」

「ああ。構わないが、シャロ、コーヒー大丈夫なのか？」

「ええ…少しだけなら…」

おっと、これは、シャロコーヒー酔いルートですよ

見てろよ…ココアが増えるぜ

数分後

「みんな〜私のために遊んでくれてありがとう〜」

ほらな。

コーヒー酔いのシャロとココアが意気投合している間、俺は頼んでいたコーヒーをゆつくりと飲む。

「レオも〜久しぶりなんだから〜」

そう言っただけで抱きついてくる。

女の子が抱き付いてきて興奮しない男子などいないと誰かは言うだろう。だが、言わせてもらおう…興奮しないと！

「シャロ…引っ付くなら俺よりもチノやココアにしておいた方がいいぞ」

「しようよね〜チノちゃん〜」

「こ、ココアさんが二人になりました!?!」

「ちよー！シャロちゃん！チノちゃんをモフモフしていいのは姉である私だけなんだからね！」

そんなこんなで数十分後

シャロが寝てしまい、更には雨が降り始めてしまった。

「雨が強くなってきたね」

「風もです」

「…こりや歩いて帰るのは無理だな…」

生憎傘なんて持ってない。それに、この風だと傘なんてあっても無
いような物だろう。

「三人とも、むかえ呼ぶから家まで送って行くよ」

なんとという心遣いだろか…。だが、俺や千夜はその選択肢を選んで
も別に良い。だが、問題はシャロだ。原作通りならあの家を見せたく
ないはず…

「いえー私が連れて帰るわ!!」

そして、千夜がシャロをおぶって外へ行くが…

「千夜ちゃーーん！」

雨の中千夜がラビットハウス目の前で力尽きたのだった。

その後、チノがびしょ濡れになった千夜とシャロを連れてお風呂場
前まで案内した。

まあ、この時俺とリゼ、ココアと一緒に付いているのは言う
までもない。

「お二人は先にお風呂をどうぞ」

「ありがとう」

「私まで泊まって良かったのか？」

そう、いつの間にか皆（俺も含む）泊まることになっているのだ。

「リゼちゃん、お泊まり緊張してる？」

「いや…ワイルドなキャンプしか経験したことないから…こんなの始
めてで…」

「ワイルド？」

「てか、俺も泊まって良かったのか？」

「大丈夫です。服のサイズは何とがありますから」

「…嫌な予感しかしねえ…」

そして、チノの部屋へ移動して…

「チノ部屋って、チノって感じだよな」

「あー…」

チノの部屋にてココアがチノの着ている中学校の制服を見つける。

あれ？この中学校の制服…妹と同じ制服だ…。

そんな事を考えていると、いつの間にかココアが中学校の制服を着ていた。

え？生着替えを見れた、羨ましいって？

いや、全く見てなかったからノーカンだよ？

「ジャーン！チノちゃんの制服着てみたよ！」

「そのまま中学校行っても違和感無くて心配だ…」

「本当！ちよつと行ってくる!!」

そう言っ走り出すココア。

「待って下さい。外は大雨です!!」

「そういう問題じゃない！」

「ココア！お前が行ったらある意味犯罪…」

「だから、そういう問題じゃない！」

そう言った後ココアは人の話を聞かず走ってチノの部屋から出ていったのだった…

数分してココアが大雨により進路を塞がれていることに気付きたチノの部屋に戻ってきた。

「それじゃ、次にチノちゃんの制服を着るかじゃん拳で勝負だよ！」

そして、何か始まった。

「私は参加しません。いつも着てますし…」

まずはチノが離脱。となると…

「私は今着てるからパスだよ」

ココアも無理。

そう…

「なら、レオ、お前と私だけだな」

そうなるわな。だが、俺は女装趣味、ましては制服フェチなんて

持っていない。だからこそ…この勝負…勝たなくてはならない!!

「そうだな…リゼ…絶対に負けない…いや、負けられない!!」

「!!なんてプレッシャーだ!?まるで幾つもの戦場を駆け抜けたコマンドーのようだ!?!」

俺はあんなスゴい人じゃ無いんだけどな…

「それじゃ、一回勝負だよ」

お互いに拳に力を込める。別に殴るとかじゃないぞ。

「最初はグー」

お互いにグーを出した後

「じゃん拳…ポン!!」

お互いの発声が重なる。結果は…

俺はパー。リゼがグー。

「よっしゃー!」

「く…仕方がないか…」

とか言うリゼは満更ではない表情をしている。そういや、リゼって可愛いものが人並みに好きだったもんな…。

そして、リゼがチノの制服に着替えた直後…

(俺は見ないように顔を反らしました)

シャロがタイミング良く部屋に入ってくる。

そしてそれに気付いたリゼはあまりの恥ずかしさにカーテンに隠れてしまう。

「こ、これは違う!!じゃ、じゃん拳に負けて…」

だが、シャロにはその言葉は届かずリゼの中学の制服というレアな格好に目が釘付けになっていた。(目が輝いてやがる…)

「じゃあチノちゃん、お風呂行こう」

「はい」

「お、おい!」

「…まさかのリゼ放置…」

その後シャロは輝いた瞳でずっとリゼの事をココア達が戻ってくるまで見ていた(その間俺は携帯を少しいじっていた)

「上がったよ」

「まだやってたんですか」

「じ、じゃあお風呂に行ってくる。あ、レオも一緒にどうだ？」

「ぶ!」

「ちよ!リゼ先輩!何言ってるんですか!」

俺はあまりにも現実離れした提案に吹き出してしまった。

「いや、だって二人ずつ入ったら私もレオと入った方がいいと思っただんだか?」

「それ、俺がやったら犯罪ですよ!」

「え?どういう事だ?」

「リゼ先輩、レオは男です!」

「え?レオちゃんって男装女子じゃなかったの?」

「俺の事をいまままでどう見てきたのかハッキリわかったんですけど!?!」

「レオさんが男…それは本当なんですか?」

「本当も何もそれが現実なんですけどね!?!第一一人称俺だし、男物の服着てるし!」

「それにしても、さらつと女の子の部屋に入るなんて、男子としてはどうなんだ?」

「いや、別に。友達に男も女も関係無いと思うんだが?」

「全くもって正論だ!」

「兎に角、リゼ先輩とお風呂は駄目!!」

「当たり前だろ。俺、死にたく無いし」

「何故私とお風呂入る!!死になっっているんだ?」

そんな話をしたあと、リゼは一人でお風呂に向かうためにドア近くにいたココアの前を通る。

「お?なんかココアの匂いがするぞ?」

「んはは!私の匂いって何?」

「飲む方のだよ!」

「バーン!入浴剤でした」

そう言っただけココアはココア(飲む方)の入浴剤をリゼに見せる。

あれ?リゼの後に入るのは俺だろ?

…ココア（飲む方）の香りに俺はなるのか？

「これでリゼちゃんも甘い匂いに〜」

「余計なことを…」

そのあとリゼはお風呂場に向かって行った。

リゼが入り終わり次に俺が入る番となる。

お風呂場に向かう途中俺はチノの父親と廊下で出会う。

「あ、どうも。今日は泊めていただきありがとうございます」

「いや、チノやココア君の友達を雨の中帰らせるなんて出来ないからね」

カツコいい…俺はこんなカツコいい男になりたいよ…

「さつきチノに言われたんだが、君男なんだってね」

「ええ。見た目のせいで良く間違われるんですよ」

「男物の服は僕のしか無くてね…少しブカブカだろうけど我慢してくれ」

「心遣いありがとうございます」

そう話した後、チノの父親と廊下ですれ違う。その際にチノの父親が何か落とした。俺はその落とした物に目をやった。

それは、五角形の何か。一見ペンダントに見える。だが、俺はあれを知っている。そう、BLEACHの原作知識でメインキャラの一人が使っていた武器。五角形の滅却十字。

そう、滅却師の正当後継者のみが持つことを許されるものだ。

「おっと、すまないね。大事な物でね」

そう言つてチノの父親は五角形の滅却十字を拾う。

「まさか…チノのお父さんが滅却師だとはね…」

「…へえ、滅却師を知ってるとは…」

以外である。まさか、ごちうさキャラの中、しかもチノの父親が滅却師だと誰が思うか。さらに五角形の滅却十字持ちときた。

「まあ…一応は知ってますよ」

そう言つて俺は代行証を見せる。

「それは…確か代行証…ということとは死神かい？」

「死神代行つて言つた方が正しいですけどね」

「そうか…死神代行か…そんな人がこの街になんで来たんだい？」

「まあ…俺も学生ですし…学業のためですかね。あ、俺、チノのお父さんが滅却師だということは誰にも言いませんから」

「大丈夫だよ。僕は昔に滅却師を辞めている。この五角形の滅却十字はお守りのような物だよ」

「そうですか…」

死神や破面達はもうこの世界に滅却師がいないと思っている。だが、もし生き残りがいたとしたらどうするか…

うん、どうもなんないな。

「それに、今や死神も滅却師も争いを好まない。だから、僕は今こうやってラビットハウスのバータイムのマスターをやっているんだ」

「そう…ですよね」

「…君はチノやココア君達を守るのが仕事…かもしれないね」

「…はあ…？」

「さて、お風呂が暖かいうちに入ってきたらどうだい？着替えの方は用意しておくから」

「あ、ありがとうございます」

そう言つてチノの父親は廊下を歩いて行ってしまった。

この後お風呂に入りココア（飲む方）の甘い香りに包まれてチノの父親から借りたパジャマ（水色と白の水玉模様）に着替えて（実は半袖半ズボンで、俺が着たら丁度いいサイズになっていた）チノの部屋に戻った。

チノの部屋では千夜がタイミング良く怪談話をしようとしてた所だった。

「とっておきの話があるの…」

そして千夜の怪談話が始まった。

途中停電が起きたり、灯りをロウソクにしたりと雰囲気が高（怪談話にとって）の状態となり、皆の恐怖がMAXとなっていた。

「というわけなの。おしまい。さあ、怪談はこれくらいにして、もう寝ましょ」

「ぜ、絶対取り憑かれる…」

ほら、あまりにも怖くてココアとシャロ震えてるじゃん。チノなんて耳塞いじゃってるし。リゼは呆れた顔だが、多分怖かったはずである。

まあ、話の内容的に虚絡みの話し（俺の脳内解析）だったから俺はあんまり怖く無かったけど。

「そんじゃ、俺はチノのお父さんの所で寝るから…」

「ま、待って！お、お願いだから、この部屋で寝て？」

「そ、そうね…れ、レオなら、幽霊とか倒しちやいそうだし…」

震えてるお二人からの要望。

ようはこの面子で寝るのが怖いと…

しやあない。

「じゃあ、俺は離れて寝るから」

そう言って俺は離れた所に布団を敷いた。

各自布団を敷いた後、各々に眠りについた。

夜中

雨の音が響く中俺は目を覚ます。トイレ等で起きた訳ではない。

（霊圧だ…これは虚…しかもメノス…ギリアン級が…四体程か）

そう、霊圧を感じたのだ。

俺は枕元にあった代行証を使って死神の姿へとなる。そしてこっそりと部屋のドアを開けて廊下に出る。

廊下でリゼがシャロに抱き付いていたが今俺の姿はこの二人には認識されていない。それにこの事は二人だけの秘密になるはずだ。俺が口出しするようなことじゃ無い。

そんな訳で俺はラビットハウスから出て虚のいる所へ向かった。

雨の中俺は何処かの家の屋根の上でメノスを見ていた。

頭の上から黒い布みたいなのをすっぽりと被った鼻がとがっている仮面の虚が四体。ゆっくりと街の中を歩いていた。大きいため非常に目立つが、誰もこんな怪物が街の中を歩いているなんて思わないだろう。

あの程度なら俺の始解で何とかなる。

全く：本当なら俺は死神代行はやらなくていいはずなのにな…

実は俺は今学業のためと口実を言って死神代行としての活動を控えなければいけないことにしている。中学の時に俺は死神代行として色々やっており（尸魂界でもかなり有名になる程）その功績などが称えられて今や一番隊副隊長にならないかと誘いが来ている程だ。

だが、俺は日常生活がしたいだけなのだ。そう、レオは静かに暮らしたいのだ。なのに死神代行、更には見た目のせいで虚（破面も含む）に追われる毎日。

それが嫌だから死神代行としての仕事を極力避けている。

だが、今回ばかりは仕方がない。

まさか現世にメノスが現れるなんて誰が思うか…

尸魂界からの増援を待っていたらこの街がメチャメチャになっちゃう。

俺一人だけで何とかしなきゃいけない。

俺は刀を抜いた。

「行きますか!!行嫌様動（いきようどう）」

その声と共に俺の鞘から抜いた刀の形が変わる。縁の円の木（のようなもの）が切羽を中心に十字を残して消えていき、その十字を囲うように円ができ縁の色が真っ黒になる。そして刀の丁度半分の峰に二カ所程鋸の刃のようなものができる。

これが俺の斬魄刀：行嫌様動だ。

俺は始解した斬魄刀を持ってメノスに向かって行く。メノスも俺の存在に気が付いたようで此方に攻撃しようとする。だが、その前に俺は一体のメノスの巨大な仮面に刀を突き刺す。

勿論メノスにとっては掠り傷程でもない。だがこれでいいのだ。

俺は刀を抜いて近くのメノスを斬りつける。

勿論ダメージ等無い。

「行くよ!!行嫌様動!」

その声により先程斬られたメノスが消える。

そう、これは俺の斬魄刀の能力。斬った物や場所に別な物を入れ込

むことが出来る能力。

仮面を刺したメノスが仮面を真つ二つになるように引き裂かれて先程の斬ったメノスが出てくる。

まるでメノスの脱皮みたいだ。だが、仮面が真つ二つになったメノスは少しずつ消えていつている。

残りは三体。

一体のメノスが俺に向かって虚閃を放つ。だが俺は避けない。いや避けることが出来ない。もし避ければ街に被害が出てしまう。ならばどうするか。答えは簡単。

俺はメノスの虚閃を斬魄刀で斬る。その瞬間に虚閃が消えて斬りつけたメノスの切り傷から先程の虚閃が発射され虚閃を放ったメノスの顔が仮面ごと蒸発する。

これで残り二体。

そう、俺が一番隊に招かれているのは功績だけじゃ無い。卍解レベルの始解を操れるためでもある。

さて、そんな話しは置いておいて、残りの二体のメノスをどうにかしなくては…と言っても簡単だ。

俺は自分の霊圧のコントロールを始める。

「滲み出す混濁の紋章 不遜なる狂気の器 湧きあがり・否定し痺れ・輝き眠りを妨げる爬行する鉄の女王 絶えず自壊する泥の人形 結合せよ 反発せよ 地に満ち己の無力を知れ 破道の九十 黒棺！」
その瞬間に一体のメノスの顔が黒い長方形に被われ、黒い長方形が消えるとメノスの顔が既に潰れて微塵も残っていないかった。

さすが、破道の九十だな。まあ、俺の黒棺は本来の黒棺の5分の1程度だけだな。

残りのメノスは一体。さて、どうするか…

そう思っていた矢先、メノスに青い矢が次々と刺さっていく。どうやら誰が矢を撃ったようだ。

大量の青い矢により消滅してしまったメノス。俺は矢が放たれた方を見る。そこにはフードを被った一人の人影があった。手には青い霊圧の弓。だが形が単純な弓の形をしている。しかも、身長はそこ

まで高くない。(俺よりは高い。予想だが、リゼ程だろうか)

フードを被った青い霊圧の弓を持った人(多分滅却師)は俺の姿を確認した後家の屋根を走るようにして何処かに行ってしまった。

別に追い掛ける必要も無いと思った俺は何とかラビットハウスマで戻ってこつそりとチノの部屋まで戻り、自分の肉体に戻ったのだつた。

この時、既に雨は上がっていた。

第4話 ラツキーアイテムはコーヒーと妹？

前回のあらすじ

レオ君男だと皆に話して更にはチノの家に泊まったよ。

あ、後チノのお父さんが滅却師だったり、謎の滅却師が現れたよ。

◇

あれから数日が立ち俺はまたラビットハウスの近くに来ていた。

実は俺はラビットハウスのコーヒーが入り殆ど無いお金を出してまでコーヒーを飲みに来ていたのだ。

後、なぜだか知らないが俺がラビットハウスに行くとき必ずバイトの子(ココア、チノ、リゼ)がいなくて、チノのお父さんが店にいる。そのためチノのお父さんと話す機会が増た。その際にバイトを探していると話したらラビットハウスでバイトしないかと誘われたのだ。予想外の事で一瞬驚き何も言えなかったが今日は、その返事をしにワザワザラビットハウスに来た…というわけ。

そんな訳でラビットハウスの近くに…

「いらっしやいませ!!」

…大きな声がラビットハウスの方から聞こえた。この声からしてリゼだろう。

なんか入りづらいな…

…もうしばらくしてから行こう…

俺はそこら辺を歩いて時間を潰し(もう迷わない)ラビットハウスに来た。

ラビットハウスに入った後俺はチノのお父さんの部屋に向かった。

チノの家の廊下で…

「栄養取っていっぱい寝なきやダメー!」

とココアの声が聞こえた。

なんの話をしているのやら…

とそんな事を考えているとチノのお父さんの部屋に到着。俺はノックをした後部屋に入る。そこにはチノのお父さんとティツピー

がいた。

あ、先に行つておくがチノのお父さんには入つてきていいと許可を貰つておいたから大丈夫だぞ。

さて本題に移ろうか。

「あの…チノのお父さん。バイトの話しなんですけど、俺には断る理由がありません。なのでここでバイトさせてください」

「…わかったよ、レオ君。明日からよろしくね」

「は、はい!!」

こうして、俺はラビットハウスでバイトすることとなつたのだつた。

次の日

俺は学校が終わつて直ぐにバイト先へとなつたラビットハウスに向かつた。

そこでチノのお父さんからバイトに使う制服やバイトの内容を教えて貰つた。因みにチノとココア、リゼは今日は休みだったそうだ。

因みになのだが俺のバイト用の制服はチノ等の制服に似ており違いと言えば色がチノの制服でいう水色の部分が灰色、リボンの代わりに青と白のツートーンカラーのネクタイ、後はスカートの代わりに黒いズボンを履いていることぐらいだろう。

数日後（尺の都合）

俺がラビットハウスでバイトを始めて数日。実はまだココア達と一緒に仕事をしていない。（その代わりにチノのお父さんから色々教えて貰っている）

まあ、わざと会わせていないのか、またまた会わせていないのかわからないがあの人達の驚いた表情は是非とも見てみたい。

そんな考えをしている学校での昼休み。

向かえの廊下からココアと千夜が歩いてくる。ココアの手にはこの学校の購買で発売されているコロツケパンが、千夜の手には白と黒で王冠を被った兎…甘兎庵の看板兎のあんこがいた。

「おーココア、今日はお弁当じゃないのか?」

「うん…少し色々ね…」

おっと、ココアのテンションがいつもより低い。これは触れてはいけないことだったか？

あれ？確か原作ではココアが凄く不幸になる話しがあったような…

「んじや、千夜、ココア、また教室で…」

と言つてすれ違った瞬間、ココアの後ろ姿に見えてはいけない物を見ってしまう。

「おい、ココア…」

「何？」

「水玉…見えてる…」

「水玉…こ、ココアちゃん!!」

どうやら千夜がその事に気付いたようだ。

「え？何々？」

「あの…多分だけど…昼休み前にトイレに行った後…そのスカートが捲れて…」

「？」

「ココアちゃんの水玉が…」

「はう!？」

あまりにもショックでコロツケパンを落としてしまうココア。うわ…不幸だな。あの不幸少年並みだよ…

「て、てことは…レオ君にも見られた…ってこと…」

あまりの恥ずかしさに座り込むココア。

あ、ココアと千夜は俺が男だとわかってから君付けで呼んでくれるようになったよ。やったね！

「レ、レオ君の変態!!」

「え!?!ブエゴラレ!?!」

千夜のビンタが俺の頬にクリーンヒット。更には女の子とは思えない力で俺は数メートル吹き飛んだ。確か千夜は追い込まれると凄い力を発揮するんだっけ…

ある意味女の子設定の方がさっきのダメージを負わなかったのでは？と考えてしまう俺はもう男の娘としての道を進んでしまったの

かもしれない。

放課後

千夜のビンタにより少し膨らんだ頬を擦りながら俺は一人家に帰っていた。

いや：気まずいよな：わざとじゃ無いとはいえココアの：水玉見ちやっつたし：千夜には思いつきりビンタされるし：

そんな訳で一人で家に帰って来た後、気分転換にベランダにある花に水をやることにした。小さいベランダで小さい花達だが世話をしている、少し落ち着く。

え？男の俺が花の世話なんて気持ち悪い？いいんだよ。俺の夢は花屋なんだ。花を見てると落ち着くし、綺麗な花を誰でも共用してほしい。そう思ったからな。それに今時男の花屋なんて普通だ。

まあ、話しは置いておき、花に水をやる。

だが、ハプニングとは必ず起きるもので俺は手に持っていたジョウロを下へ落としてしまう。俺の部屋は三階にありジョウロ程度なら落ちて怪我はしないはずだ。まあびしょびしょになるが：

俺はジョウロの落ちた下の方を見る。どうやら丁度下に人がいたらしくその人の近くにジョウロが落ちていた。

「すいませーん！」

と俺は大きな声で謝ったがびしょびしょになった（多分）人は隣にいた人と話しながら何処かに歩いて行ってしまう。

急いで追いかけようと下に降りてジョウロの落ちた所周辺を探してみるがびしょびしょになってしまった人は見つける事ができなかった。

今度からはジョウロを落とさないように気を付けようと心に誓った俺がいた。

（びしょびしょになったのがココアだと知ったのは次の日だった）

その日はある意味罪悪感ある日だった。

そんな日の夜、俺はエプロンを着けて一人で夕食を作っていると（因みに夕食はペロンチーノと野菜のスープ）俺の部屋のチャイム

が鳴る。

もう夕方を過ぎて外は真っ暗。こんな時間に訪問者とは怪しい。

第一俺の部屋は友達（ココア達）にすら教えていない。知っているのは精々両親だけだろう。となると答えは絞られる。

そう、虚（変態）という可能性だ。

俺はキーホルダーにした刀を手に持ち、いつでも刀を使えるようにしておく。

そして恐る恐る玄関に行き訪問者が誰なのか覗き穴から見る。

人影が無い。イタズラか、それとも俺を誘う罠か…

考えても拉致が開かないので玄関の戸を俺は開ける。

左を見る。誰もいない。

そして右を見た瞬間…

「ア〜ニ〜キ〜」

そう言っただけと俺と同じような髪色の少女が俺に飛び付いてくる。それを受け止める俺。

これはこれは予想外の訪問者だよ。

「おい、マヤ…どうしてここに？」

「何となく遊びたかったから来ちゃったよ♪」

全く、元氣印の妹だ。

「お前な…俺の家の住所教えてないはずなんだけど…」

「えっとね〜パパのメモ帳に書いてあったのを見つけて、それを覚えてたんだ〜」

「お前な…全く…もう暗いから家まで送ってやるから…」

「え〜、ママに今日兄貴の家に泊まるって言っちゃったよ〜」

「何してんの!?!てか勝手に泊まるとか決めるな!!」

「へへへ〜」

「照れ笑いするな!誉めてるんじゃないぞ!」

「ねえ、私お腹減っちゃった!晩御飯何?」

「図々しいにも程があんだろ!」

そう、この子が俺の妹、条河 麻耶。そう、チノのクラスメイトであり、チノの数少ない友達である。

…そういや、たまたま妹の名前がマヤっていうだけだと思ってたけど、まさかごちうさキャラだとは…

…あれ？俺ごちうさキャラの兄というとてもおいしいポジションにいるのでは…

「ねえ、兄貴早く入ろうよ」

「わかったよ」

そうやって俺は抱き付いたままのマヤと一緒に玄関の戸を閉める。

そしてリビングへ向かう（この時マヤの靴は確りと脱いでおります）

「へー、ここが兄貴の根城か」

「勝手にいじるなよ」

「いやいや、始めて入った部屋は隅々まで調べないと…」

「それはゲームの中だけの話しにしる。現実でやったら犯罪だ」

「いやいや、兄貴。やるなど言われるとやりたくなるのが人間ってものなんだぞ」

「やったら晩飯抜きでしかもこの家から追い出すからな」

「兄貴にそんな事出来るの？私知ってるんだからな。兄貴は私が可愛くて仕方がないってことが」

「ぐ…」

そう、俺はこの一人だけの妹がとても大切なのだ。俺はマヤを守るために死神になったと言っても過言ではないぐらいに。

てか、もう溺愛である。

「兎に角、飯、めーし」

「わかった、わかった。飯な。ペペロンチーノと野菜スープだけどいいか？」

「いいよ」

そうやって俺は先ほど作っていたペペロンチーノと野菜スープを一応用意しておいた来客用の皿に盛る。

因みにマヤは俺の部屋のリビングにて胡座をかいて座っている。

「に、しても、兄貴のエプロン姿、なんか新鮮だな」

「そうか？」

俺は料理をリビングに運びながら反応する。

「遠目からみたら若奥さんみたいだぞ?」

「なら、マヤが夫か?」

「おい、レオ。飯はまだか?」

渋い声で飯をねだるあたりボケと本音を組み合わせでいやがる。

「ほら、ペペロンチーノと野菜スープだ」

「ちえ、なんだよ。折角ボケたのに」

「最初にボケた俺も悪いがめんどいからツツコミを入れたくなかった。ほら、冷めないうちに食べろ」

「はい。いただきますーす♪」

「いただきます」

妹との夕食を過ごした後、俺はお風呂を沸かす。

「風呂沸いたら先に入れよ」

俺はリビングでテレビを座りながら見るマヤに向かって言った。

「えー一緒に入ろうよ」

「馬鹿か?お互いの年齢を考えろよ」

「そういや、兄貴に聞きたいことあったんだ」

「なんだ?この優しいお兄さんが何でも答えるぞ」

「実はね、この前の雨の日にでっかいお化け見たんだ」

「この前の雨の日?」

あれ…その日って…確か俺がメノスと戦った時じゃ…

もしかして、マヤ…虚が見えるんじゃない?」

「そうか…」

こうなれば、本当の事を話すしかねーかもしないな…

と俺が心のなかで身構えてると…

「お化けにCCCって効くかな?」

「何故、幽霊に軍隊においての近接格闘しなきゃなんねーんだよ!てかどこでCCCとか知ったんだよ!!」

「いや、この前会った眼帯かけてるオッサンから教えて貰った♪やり方も教えて貰ったよ♪」

眼帯かけてるオッサン!?まさかスネーク!?

「まあ、CCCは置いておいて。マヤ、お前が見たお化けの特長を教えてくださいませんか？」

「え？いいけど…なんか黒い布見たいな体で白い顔…あ、鼻が長かったよー！」

うわ…もろ俺が戦ったメノス達だ…

「怖くなかったか？」

「そりゃ怖かったよ！あの嵐にあんなお化けが外にいるんだもん！私すぐベットに戻って寝ちやっただよー！」

「そうか…」

俺は風呂のお湯を止めてポケットから代行証を取り出してマヤの目の前に置く。

「…？」

「マヤはこれ見えるか？」

そう言っただけ俺は代行証を指差しながらマヤに向かい合うように座る。

「このドクロの描かれてる木の板のこと？」

はい、見えます…

「はあ…ビンゴか…」

「なんの話し？」

「マヤ、色々と衝撃的な事を話していくけど、この事を誰にも、特に母さんには言わないようにしてほしい」

「何々…二人だけの秘密？それとも国家レベルの機密事項？」

「その二つかな」

俺は真面目な顔でマヤを見つめる。マヤも俺が真面目な話しをしようとしていることに気が付いたらしく此方を見つめる。

「マヤが見たお化け…あれは虚っていうんだ」

「虚？」

「で、虚にはいろんな種類がいて、マヤが見たのはそのなかでもかなり凶悪化なやつ。あいつらは、人を殺す」

「またまた…」

「冗談じゃないんだな…これが」

「マジっすか?」

「マジっす」

「何?目撃者は全員あのお化けに食べられちゃうとか?」

「いや、まず目撃される事が無いんだ。普通の人なら虚どころかこの代行証すら見えないんだからな」

そう言っただけはもう一度代行証に目を向ける。

「どういうこと?」

「まあ…特異体質って奴。幽霊が見える人は虚が見える。まあ、虚も幽霊なんだけど、悪霊って言った方がいいんだが…」

「と、いうことは、私はその虚を見ることが出来る特異体質ってこと?スゲー!かっけー!」

あ…やっぱり俺の妹だ。そこにかっこよさを見る辺り俺と一緒にだよ。まあ、現実はその簡単じゃね無いんだけどな。

「マヤ、虚を見れるってことはだな、簡単に言うて虚に狙われるってことなんだかんかな」

例えば俺みたく。

「大丈夫。だってそんなときは兄貴が守ってくれるんでしょ?」

「…」

全く…わかってやがるぜ…

「それに、私にはCCCがある!」

「何故そこまでCCC押しなんだお前は!」

と、まあ、虚について色々と話した後、各自でお風呂を入り…

「兄貴と一緒に寝ようぜ」

「同じ事を言わせんなや!お前はベットで、俺は下に布団敷いて寝るからー!」

と、こんな感じに俺と妹…マヤだけの夜が更けていくのだった。

第5羽 レオと悪意無き敵意

前回までのあらすじ

レオ君バイト先が見つかったり、ちよつと不幸や罪悪感があったりしたよ。

あ、後妹が虚を見ることができるとに気が付いたよ

◇

妹と俺の一夜が過ぎて数日。

俺の通っている学校で今度球技大会が行われることとなっていた。

男女別の種目で男子は野球、サッカー、ハンドボール、バスケの四

種目、女子はバレー、テニス、ドッチボールの三種目だ。

千夜とココアはバレーに出るらしくココアだけは張り切っていた。

そーいや千夜って運動苦手なんだっけ…

そんな事を思った日、バイトのシフトは休みだったのだが、チノのお父さんから急遽バイトに出てくれと連絡があった。

別に予定等は無かったので俺はすぐにラビットハウスに向かった。

ラビットハウスに着き扉を開けるとチノのお父さんが一人で接客をしていた。

「すまないね、レオ君。今日は休みなのに」

「いえ、構いませんよ。でも確か今日は別のバイトさん達のシフトでしたよね?」

「ああ。そうなんだが、少し用事があるみたいなんでね。先に帰ってもらったよ」

少し用事ね…ああ、球技大会の練習か。

というわけはアニメの第5羽くらいなのかな?

「わかりました」

そう言つて二階のチノの部屋の隣の部屋に行き着替える。(ここは物置だったのだが、俺がバイトすると決まった時に急遽チノのお父さんがこの物置を男性用更衣室にしてくれた)

着替えが終わりすぐに俺はバイトに出る。

数時間後

バイトが終了し着替え中にチノのお父さんが衣装室にやってくる。

「本当に申し訳ないね」

「いいですよ」

「そういえば君はココア君達と同じ学校に通っているらしいね」

「まあココアとは一緒のクラスですし…」

「球技大会、頑張ってくれよ」

「まあ…人並みには…」

そう言っただけでチノのお父さんは部屋から出て行ってしまふ。時間帯的にバーの時間になるな。

そんな事を思いながらも、チノのお父さんにねぎらいの挨拶をして俺は夕暮れの中自宅へ向かう。

その途中、大きめの石畳の橋の下の公園で運動をしていると思われる女の子5人を見つける。

多分だが、ココア達だろう。ここで関わりと確かに視聴者的には面白い事になるだろう。例えば千夜の打ち返したバレーボールが顔面ヒットしたり…。生憎だが俺にはそんな芸人魂は無い。なのでここはいくら原作通りでも素通りさせてもらおう。

「あー！レオ君!!」

と声が…ココアの声が下から聞こえた。

早いフラグ回収だったよ…

俺は見つかったからには逃げられないと思いつつボトボト橋の下の公園に向かう。

「レオ君！お願いがあるの！」

ココアは俺に一目散に近付きそう言ってきたのだ。嫌な予感しかないのは俺だけだろうか…。

「なんだよ…用件しだいでは聞かないことも無いけど…」

「ありがとう！実はね、リゼちゃんを倒したいの！」

「さようなら」

俺は用件を聞いた瞬間に頭を下げて別れの言葉をいいココアがいる所とは真逆の方向に歩き出すとする。だが、逃げようとする俺の左腕をココアはぎつちりと両手で掴む。

「お願い！」

「…はあ…しようがない。でもなんでリゼを倒さなければならんだ？」

俺は公園の別の場所でチノに何やら教えているリゼの姿を見つめる。

「このまま負けてちやお姉ちゃんとしての威厳が無くなっちゃうよ！」

「それ俺と関係無くね!?!」

その後の話だとココアとシャロ、千夜とリゼが話の流れでバレーボールの試合をすることになったそう。

それで、負けた（リゼ一人）そう。

「お願い！シャロちゃんをモフモフしてもいいから！」

「なんか交渉のだしにされてる!?!」

とシャロの登場だ。少し眠そうな顔をしているあたり多分カフェインが切れかかって寝てすぐ起きたのだろう。

「いや、俺がシャロをモフモフしたら犯罪だから」

「ならチノちゃんを…」

「そういう問題じゃねーよ!!」

「何の話をしてるんだ…ってレオ！来てたのか」

とココアとシャロを倒したい張本人が登場。

「リゼちゃん！リベンジマッチだよ！」

ココアがリベンジマッチ宣言をする。

「レオ君が…」

ココアに指差される俺。

「なら、レオさん対リゼさんの頂上決戦にしましょう」

そういうの間にか仕切っているチノが言う。

「そうか。なら、勝負だ！レオ！」

どうやら俺には拒否権が無いようだ。

そして、俺対リゼの勝負（バレーボールではなくバドミントン）が始まってしまった。

しかも、リゼはやる気満々である。

こうなったら流れに身を任せるしか選択肢は無い。

数分後

俺はリゼを甘く見ていた…

俺とリゼは試合が始まってから今までサーブをサーブで返すという大技（本当はルールを良く知らない）をやっていた。

「ルールがハチャメチャです…」

チノがやつとツツコミを入れてくれたがそれに答える程の体力は既に俺の体には無かった。

「はあはあ…」

「はあはあ…やるな！レオ！」

「そつちこそー！」

お互いに体力は限界（俺はある程度力はセーブしていたが）

ならば、大技で決めるはず。今のサーブ券はリゼ。ということは…

「いくぞーレオ!!パトリオットサーブ!!」

放たれるサーブ。しかし、俺にだって勝機が無い訳ではない。このサーブさえ凌げば俺の勝ちだ（何となく）。

迫高速の羽。これを打ち返すにはネット部分では破けてしまう。そう考えた俺はバドミントンのラケットを横にし鉄の部分を使うと考えた。そう、気持ちちは居合いを行う時の感覚。

来た羽を俺はラケットをまるでバットのようにして打ち返す。

羽はピンポイントで鉄の部分に当たる。

「ウォー!!」

そして…

バドミントンの羽は真つ二つになった。

その後、結局俺の負けとなり（バドミントンの羽を真つ二つにしてしまったため）ココアのリベンジマッチは敗北に終わった。

そして、それぞれ帰宅しようとしたとき…

「まで、レオ」

リゼに呼び止まれた。嫌な予感しかしないんだが…

「お前、本気じゃ無かったろ…」

「まあ…女の子を怪我させちゃ悪いし…」

「なら、次は本気を出してくれ」

「えーと…頑張ります…」

「そして、次こそは確実に勝つからな!!」

なんか、わからないけどリゼは今回の勝因に納得いかない様子。そして再戦したいとのこと。

そして、帰宅した。

因みになるのだが、この時リゼは俺の事をライバルだと思い始めたそう。

(CM的何か)

父の日が迫る今日この頃。

父と共に生活していた俺にとっては父親の大切さは誰よりもわかる。毎日身を削る思いで働いてお金を稼いでいるのだ。感謝の気持ちとはとてもある。

だからそこ父の日に恩返しとはいかないものの何かささやかなプレゼントを送りたい。

そう俺は思った。

そう、今こそ俺はバイトを頑張らなくてはならない！俺は父の日にマッサージチェアを贈ろうと思っている。いつも疲れている父親に出来る事なんて精々マッサージぐらいだ。

だからマッサージチェアを贈る。そう決めた。

だからマッサージチェアを買う為にバイトを頑張るのだ。

おっと、同じ事を何度も言ってしまったな。すまない。

簡単に言おう。バイトのシフトを増やしてもらった。

そんな訳で俺は今ラビットハウスの前にいる。closeと書かれた看板が出ているがここで働いている俺にとっては無意味だ。

俺は問答無用にドアを開ける。そこにはバイトの制服姿のココア

とチノ、そして学校の制服を着ているリゼがいた。

「あれ？レオ君、まだお店開けてないよ？」

ココアは俺がお客として来ているのだと思ったのだろう。

「あ、少しチノのお父さんに用事があるだけだから」

「今、父はいません」

「大丈夫、少し上がらせて貰うよ」

と言って俺はラビットハウスの奥に向かって行く。

そしてラビットハウスの制服を着てお店に出る。

チノやココア、リゼは俺がラビットハウスの制服を着ている事に驚いているようだ。

「レオ君、なんでラビットハウスの制服を来ているの？」

「え？ラビットハウスでバイトしてるからだよ？」

俺は真顔で返す。

「まさか、父が言ってた新しいバイトさんって…」

「俺だけど？」

「レオ君がまさかのスケツト!？」

「リゼさんと組んだら最強です」

「何が最強なんだ!？」

「これならいつ攻められてもお店を守りきれね」

「何が攻めてくるんだよ!？」

「うくん…悪霊？」

う…何も言い返せない俺。

そんなこんなで話し始めていた。

「そういえば、ココアから聞いたぞ、この前の球技大会凄かったらしいじゃないか」

「ま、まあね…」

「本当に凄かったんだよ！バスケットのゴールに直接ボール入れちゃったんだから！」

「レオ！お前ダンク出来たのか!？」

「しかもフリースローラインからジャンプして」

「エアークォーク!?!お前は何者だ!？」

「えーと…人間？」

「何故本人が疑問系なんですか…」

「もしかしたらレオは本当は凄い奴なのかも…」

「リゼ、俺を過大評価しないでくれ…」

そして、俺とココア、チノは三人でバイトを始める。因みにリゼは別のバイトに行ってしまった。

チノはコーヒーマシンを淹れながら、ココアと俺は食器を磨きながら話を
する。

「それにしてもレオ君とバイトなんてなんか違和感あるね」

「そうか？」

「ズボンじゃなくスカートの方が自然に見えるよ♪」

「やめろ！俺は男だ！」

「レオさんは顔付きが女の子なので勘違いされやすいですよ。私も
わかりませんでしたし…」

「良く勘違いされるよ…そのせいでどれだけ嫌な思いを味わったか…
特に銭湯…」

「なんか…ドンマイです」

「でも、レオ君、可愛い事は良いことだよ！」

「そう言われてもな…」

「だからスカート履いてみて!!」

「快くお断りするよ!!」

「そういうば、レオさんはなんでバイトなんかを？」

「今度父の日だろ？それで父親になんか買ってやりたいなと思って、
あ、後欲しいものを買いたい…からかな」

「レオさんは父親思いなんですね」

「レオ君って兄弟とかいないの？」

「いるよ。妹が一人。丁度チノと同じ年のはずだよ」

「そうなんですか…」

「もしかしたらチノちゃんの知ってる人かもよ！」

「知ってるも何もチノの友達だよ…」

「それは無いと思います。私、人見知りなので…」

「まあ、この話しは置いておいて、チノはお父さんに何か送ったりしないのか？」

「そうですね…」

「なら、ネクタイとかはどう？水玉模様とかの！」

「ダメです。ウサギ柄とかじゃ無いと父は喜びません」

多分チノのお父さんはこの会話聞こえてると思うんだよね。

そして、俺はリゼと交代でバイトに入り、数日が過ぎて父の日へとなる。

バイトを終えて俺は家電量販店へ向かいマッサージチェアを購入（ギリギリ買えた）し家に送った。今からだと夕食前に届くそうだ。

そして実家に向かう。

こうして俺の忙しいバイト生活が幕を降りた…訳では無く、改めて始まったのだった。